

『除夜作・別董大』 高 適

豪壮にして節義を重んじた辺塞詩人



高適、生年不詳（七〇二頃～七六五）。生年については嗣聖十三年（六九六）、嗣聖十九年（六九八）、景龍元年（七〇七）と諸説あつて詳らかでない。

盛唐の詩人、字は達夫、また仲武ともいう。諡は忠。滄州渤海（現河北省）

の出身。生地も山東省滨州説がある。若い頃不遇で貧しく、青年時代には博徒と交わっていたが発奮して玄宗の時に有道科（進士科・明経科など科挙の科目の一つ）に挙げられ、封丘尉の役職を授けられた。その後官職を捨てて河右に遊歴し、河西節度使哥舒翰に見いだされて幕僚となった。のち官は左散騎常侍に至り、銀青光祿大夫を加えられ、渤海県侯の爵位を賜るなど、唐の詩人としては珍しく高官に達した。天宝三年（七四四）杜甫、李白と相識り、五十七歳ごろから詩を作りはじめた。辺塞詩人として有名。豪壮にして節義を重んじた性格を反映して、詩にも気骨があり

重厚である。「高常侍集」十巻がある。

☆旅の空、一人迎える大晦日の夜、作者を孤独が襲います。

除夜作 高適 除夜の作 高適

旅館寒燈獨不眠 旅館の寒燈獨り眠らず

客心何事轉悽然 客心何事ぞ轉悽然

故鄉今夜思千里 故鄉今夜千里を思う

霜鬢明朝又一年 霜鬢明朝又一年

【意 解】

寒寒とした旅館のともしびのもと、一人眠れぬ除夜を過ごす。ああ、本当に寂しい。色色なことを思い出すと旅の寂しさは愈々増すばかり……今夜は大晦日。

故郷の家族は、遠く旅に出ている私のことを思ってくれているだろう。夜が明けると白髪頭の老いたこの身に、また一つ歳を重ねるのか……。

【鑑 賞】

旅にあって迎えた大晦日の夜の感慨を歌った詩である。前半二句では、旅の途中の独り寝に愁いのつのつてくるさまを客観的に歌いあげ、後半二句において、その愁いの内容を物語る。前半後半とも対を成し、その淡淡とした四

句全対の歌い口は、旅愁のうら悲しさを表現するに当たって非常に効果的である。

(故郷 今夜 千里を 思う)

自分が千里離れた故郷を偲ぶのではなく、故郷の家族が自分を思ってくれるだろうという中国人の発想の仕方である。しかしそれが作者の孤独感を一層引き立て、望郷の念を掻き立てる。

(霜鬢 明朝 又一年)

ああ、大晦日の夜が過ぎると、また一つ年を取ってしまった。年頭の白髪も増えていく、白髪の数と同じだけ愁いが増えてゆくのか。(日本では昭和二十五年から満年齢となったが、中国では今でも数え歳であるから、新年を迎えると一歳増える)

旅先で一人過ごす大晦日、故郷にいれば家族そろって団欒し、みんなで酒を酌み交わしていることだろう。

(大木惇夫詠)

旅籠屋に 燈しび寒く 寝もやらず
何ぞや うたた傷ましき この旅ごころ
故郷も 今宵千里を 思ふべし
鬢白うして 明日はまた 齢を重ねぬ

☆再び会えないかも知れぬ友に贈るはなむけの詩

別董大 高適 董大に別る 高適

十里黄雲 白日 嘯し

北風吹雁雪紛紛 北風雁を吹いて雪紛紛

愁莫前路無知己 愁る莫れ前路知己の無きを

天下誰人不識君 天下誰人か君を識らざらん

【意 解】

見渡す限り黄色がかったたそがれの雲が垂れこめ、太陽の光さえもうす暗い。北風は空ゆく雁の群れを吹き送り、雪まで紛紛と降りしきる。

このような夕べ、君は別れて遠くに旅するのであるが、董大よ、君の行く先に親友がいらないなどと心配しなさるな。天下に琴の名手である君の名を知らない人は、誰一人としていないのだから、きつと行く先々で親切に迎えてくれることでしょう。

【鑑 賞】

董大とは、盛唐の琴の名手董庭蘭を指すという。董大のは、氏族の長者または大人という相手に対して尊敬してつける言葉である。長安で知らないものはないほどの腕前だったというが、ある収賄事件に係わった後は、琴を弾き

ながら各地を流れ歩いたという。その漂泊の音楽家に、詩人は精一杯のはなむけの詩を贈る。前半の二句は、寒さのしみる初冬の情景だが、それは同時に、空を行く雁に北風や雪が吹きつけるごとく、董大がこれから歩む人生で味わう辛苦のほどを暗示しているとも言える。

後半の二句は、精一杯の励ましの言葉ではあるが、ここは何度読んでも悲しい。旅立つ友へ激励を込めてつづられた詩句には、今生では再び会えないかも知れぬという悲壮感が満ちている。

通信機器が発達した今日において、本当の別離を知らぬ現代人が、この詩に共感するのは残念ながら難しいかも知れない。

（大木惇夫訳）

夕雲は 十里を閉ざし 日な曇り
北風は 雁をし吹きて 雪しきり
行く先に 知り人なきを な愁へそ
天の下 誰かは君を 識らざらむ

【詩の背景】

この詩は、高適と董庭蘭の送別の詩であるが、同時代に生きた李白や杜甫までも思いだされる。盛唐の時代の文人達は、お互いの立場を超えて交流し、それぞれ独自の境地

をうちたてたが、一様に激動の時代に翻弄された。

大唐帝国を最も盛んならしめた名君玄宗皇帝は、四十年経って政務に倦み、楊貴妃の色香に溺れ、政務を李林甫に任せた。その後の楊国忠等の専横は安史の乱を誘発した。杜甫は反乱軍にとらえられ長安に監禁されたが脱出し、肅宗のもとに辿り着き、その労苦に対して皇帝に諫言する立場の左拾遺になった。

（李林甫）玄宗朝の宰相。（口に蜜あり、腹に剣あり）とその奸佞（心がねじけて人にへつらうこと）ぶりを評されるが、学問、教養は乏しかったものの機を見るに敏かつ実務に優れた能吏（有能な官吏）であり、玄宗の信任を深めた。このため学者肌の張九齡らとあわず、陷穽（人を陥れるはかりごと）をめぐらせて張九齡を追い、みずからがかわって中書令として実権を握った。

玄宗皇帝の子肅宗は、自分の立場を確立するため、弟永王璘を反乱の罪を着せてまで亡き者にし、李白は永王璘の幕僚に加わったことで死刑を宣告され、一命は助かったが、夜郎に流されかけた。また、玄宗のもとから来た宰相房琯を、収賄の罪に問われた董庭蘭を庇ったと言うことで罷免した。この罷免に対して真正直に杜甫は諫言したため、肅宗によって死罪になりかけたが、まわりのなだめにより死罪だけは免れた。翌年房琯が左遷されるとき、杜甫も華州に左遷され、その後の流転が始まった。

この中で高適のみは上手く立ち回り、乱後取り立てられて四川省の刺史（都督・太守）や尹（知事）になった。

後に杜甫が成都で暮らした時は随分と面倒を見たといわれ、高適が南方の役人をしていた頃、次の詩を杜甫に贈っている。

人日杜二拾遺に寄す 高 適

人日詩を題して草堂に寄す

遥かに憐れむ故人の故郷を思うを

・・・・（中八句略）・・・・

竜鐘 還 忝けなくす二千石

愧ず爾 東西 南北の人

【大意】（杜氏の二番目、杜甫に贈った詩）

陰暦の正月七日、この詩を作って草堂に住んでいる君に送るよ。私のことを思い出すと君はきつと故郷を懐かしむだろうと、遠く離れたここから同情する。

それでもどうか、受け取ってくれ。最近、新芽を見せはじめた柳の枝の、その清涼感になんだか見るに忍びない気持ちになってくる。さらに梅の花も枝に咲きほこって、空しく断腸の思いをさせる。私は、辺鄙な南蕃にあって、どうしようもならない。心の中にはただただ絶望があるばかりで、繰り返し憂慮するのみです。

今年の正月七日はこうして空しく君の事を思ってるんだが、来年の正月七日はどこにいるか判らない。私もかつて無官だった時代から数えて気付けば、三十回も春を過ごしてたよ。あの頃は理想を抱いて燃えていたけれど、まさに風の前のチリに同じ。世の中やら旅やらの苦勞であとかもなくなってしまうてる。

それでも老いばれた身で、辺鄙な地でも刺史なんていう贅沢な職業についているんだ。それを思うと官職にしがみつくことなく、色々な土地を放浪している君に恥ずかしくてならないよ。

【参考】

☆高適は河南省開封市に祀られている。三賢祠と呼ばれるその

杜は李白、杜甫、高適の三詩人が共に旅をした場所である。

高適は、一篇を吟ずるごとに好事家の伝えるところとなった。吐蕃（チベット）との戦いに従事したので辺塞詩も多く残されている。詩風は「高古豪壯」（気高く古風でみやびやかであり、勢いが盛ん）とされる。李林甫に忌まれて蜀に左遷されて沱州を通っ



たときに李白・杜甫と会い、詩の味わいが高まった。

李林甫に捧げた詩も残されており、「好んで天下の治乱を談ずれども、事において切ならず」と評された。